

所謂自然の美と自然の愛

丘 浅次郎

教育学の書物を開いて見ると、博物学の教育的価値を論ずる所に必ず次の一ヶ条が掲げてある。即ち「博物学を授ける目的の一は生徒をして自然の美なるを感服せしめ、随つて自然物を愛するの情を起さしめるにある」と書いてある。我国の文部省の普通教育に関する法令の中にも、やはり此の説に依つたものと見えて全く同様なことが載せてある。また博物学者の方にも同様な考えを抱いて居る人が多数を占めて居る様であるから、今日の所では此の説は世間一般あま普ねく行われて居るものと見做みなさねばならぬが、我等は此の説を聞く毎に常に可笑おかしく感じて居たのである故、今その理由を此所ここに述べて聊いささかか教育学者及び博物学教授者の参考に供したいと思う。

「汝は何時いつ盗賊を止めたか」と云う文句の中に「汝は盗賊であつた」と云う意が含まれてある如くに「自然の美を感服せしめる」と云う文の中には「自然は美なり」と云う断案が含まれてあるが、我等の考に依れば此の断案が已すでに甚だ誤つたものである。虚心平気で自然を観察すれば、美なりと感ずる部分のあるは勿論もちろんであるが、それと同時に甚だ醜なりと感ぜざるを得ぬ部分も沢山にある。是は極めて明瞭なことで改めて例を挙げる必要もない。自然を観察する為に郊外へ出掛ければ、荒れ果てた草原に牛や馬の骨が乱れ転つてある傍に腐り掛つた猫の屍骸が横たわり、皮膚は破れ腸は流れ出し全部甚だしい悪臭を放つて居る、其の側に

美しいすみれ 堇の花が咲いて居て、其の隣りに新しい犬の糞つみかさなが堆つつて居ると云う如きことを到る所で実見するが、これが即ち小規模の自然の見本である。大なる自然の全部も此通りで美なるものも醜なるものも悉ことごとく其中に含まれて居る。人の掃除した所だけは暫時ざんじ例外の如くに見えるが、捨て置けば必ず上に述べた如き有様に成つてしなう。

斯かよう様な實際の有様を目前に見ながら、醜なる部分に就いては一言も言わず美なる部分のみを非常に賞讃し、恰あたかも自然は全部ことごと悉ことごとく美なるかの如くに説く者の生じたのは何故かと云うに、これは我等の考えに依れば恐らく耶蘇教キリス（ト教）の影響を受けた故であろう。慈愛に富める神が我々人間のために此の世界を造り与えたと言き込むには、勢まい先ず此の世界は美なる世界であると会得させて置かねばならぬ。蓋けだし慈愛に富める親爺は決して其の子に半分腐つた饅頭まんじゅうを与えぬと同じ理窟で、慈愛に富める天の父は決して我々に半面醜なる世界を与える道理は無いからである。それ故、耶蘇教の伝道者は自然の醜なる部分を押しえ隠し、美なる部分のみを賞揚し、針を棒とし、また時としては火を水として、盛に自然の美を説き、斯かくの如き美なる世界を我々に与えたのは実に宏大無辺なる神様の御慈愛であると説き立てたであろうが、それが基となつて今日の教育学書にまで此の説が浸み込んだのであろう。特に西洋諸国に於ては従来教育と耶蘇教との関係すけがが頗すこる親密で、昔は主として僧侶が教育を司り、今も宗教家で教育学の書物を書く人が多数にある位故、当然斯かくの如き有様になつたのであろう。

我等の考えを有りの儘に云えば、自然には美なるものもあり、醜なるものもあり、美醜の中間のものもあれば、美醜以外のものもある。それ故、自然を論ずるに当つてその美のみを説くのは極めて偏頗へんぱなことであつて、決して正当とは云われぬ。また自然の中には美なる部分があるからと云うて、直ただちに自然は美なりと説く

のは、あたか恰も象の尾だけを示し、象にはかよう斯様な細長い部分があるとの理由で、ただち直に象は細長いものなりと説くのと同じく甚だしい誤である。されば博物学を授けるに当り、若し生徒をして自然の美を感服せしめるを以て目的とするならば、故意に醜なる部分を隠蔽し、美なる部分のみを挙げ、強しいて事実を曲げて、自然に關し全く顛倒した觀念を生徒に与える覚悟で取り掛らねばならぬ。公平に有りの儘に自然を紹介し、生徒自身に直接にこれを觀察せしめる普通の科学的方法では、決して以上の如き目的を達することは出来ぬ。

博物学は自然を研究する学科であるが、其の目的は決して自然の美を探ることでもなく、また醜をあば発くことでもない。ただ自然の有りの儘を知ることである。それ故、此学を修めた者は他の人等に比すれば一層深く自然を知る様になり、他の人等が醜なりと認めるものを尚なお精細に調べて其中に美なるものを発見することもある。また他の人等が外面のみを見て美なりと賞するものの内部を検査して醜なるものを見出すこともあり、美醜ともに他の人等よりは遙に深くこれを知る訳であるが「深雪ふる遠き山辺も都より見れば長閑のどかに立つ霞かな」と云う歌にもある通り、遠方からただ表面のみを見れば非常に平穩に美しく見えるものも、近よつて細こまかく検すれば實際は醜みにくき大紛擾であることを発見することも甚だ多い。されば博物学を修めると自然の美なる部分を知るとも益々深くなるが、それと同時に其醜なる部にも常に気が附くを免れぬ故、多年此学がくに身を委ゆだねても必ずしも他の人等よりも一層自然の美を感じる様になるや否や、大に疑わしいことである。又一方には動物学や植物学を修めて一々の動植物を精密に調べると、余り非詩的に成つて自然を漠然と眺めて居る者に比べると、遙に其美を感じる力が鈍くなり、如何なる自然の美に触れても心の琴の緒が振動せぬ様になると説く人もあるが、これも決して左様な理由はない。桜は顕花植物中の雙子葉類に属するもので、其の花は花粉の伝播でんぱのために昆虫を呼び寄せる装置であると知つても、桜花の咲き揃うたのを見て美しいと

感ずることはその為に少しも減ぜぬ。また蝶は昆虫類の中の鱗翅類に属し、其の物は左右の小顎が延びて出来たものであると承知しても、菜の花に遊ぶ蝶を見て愉快に思う情はその為に毫も変らぬ。鬚えくぼは顔面の某筋肉と某筋肉との空隙へ空気の圧力により皮膚が陥入つたもの、腰部の形好く丸みを帯びて柔いのは皮下の組織に脂肪が堆つみかさなつた故と承知して居る医学生等も美人を見ればやはり美人に見える通り、凡およそ美なるものを見て美と感じ醜なるものを見て醜と感じずることは、其物に関する知識の多少とは余り直接の関係は無い様に思われる。

抑々美と醜とは何に依つて定めるかと云うに、其の標準は決して何時いつでも何所どこでも同一である訳ではなく、人種により古今により実に種々の相違がある。上唇に大きな孔を穿ち、其の中へ一杯に環を嵌め込み、笑えば其の環が立つて環の中に鼻が見えるのを美しいと思う人種もあれば、無理に足を小さくして跛を引くのを可愛らしいと喜ぶ国もある。都の人は花も紅葉もない浦の苦屋とまやを見渡して愉快に感じ、常に苦屋とまやの中に住んで居る浦人等は却かえつて浅草の仲見世を嬉しがる。歯を黒く染めねば人中へ出られぬと思う時代もあれば、前髪を突き出して得意然と歩く時代もあつて、美醜の標準は決して常に確定したものではない。また人間は美を形に現わす為には若い女の裸の像を造るが、若しも犬に美を形に現わし得る技量があつたならば恐らく若い牝犬の像を造り、豚ならば恐らく若い牝豚の像を造るであろう。詰まる所、自然にはただ有りの儘があるだけで、自然自身より見れば美もなく、また醜もない。これを見て美と称し、醜と称するのは総べて我の方の働きである。而して今日我等の有する標準を以て公平に自然を測れば、前に述べた通り美なる部分もある代りにまた醜なる部分も随分多く其の中に含まれてある。

次に仮に一步を譲つて自然を美なりと見做みなした所で、自然の美なるを感服せしめたならば、其の生徒が必ず

自然物を愛する様になるか否かが疑問であり、また自然物を愛することが果して奨励すべき程の善いことであるか否かが更に疑問である。世間では家を愛し国を愛し人類を愛し宇宙を愛する心を皆同一の心の異った階段と見做し、愛の範囲の広いほど尊いものであるかの如くに云い囃して居るが、我等の考えは大にこれとは違う。家を愛し国を愛する事には生物学上正当の理由が充分にあるが、これに反して宇宙万物を愛すると云うに至つては、全く正当な範囲以外へ逼出した本能の錯誤的作用であると思う。抑々人間は所謂社会的動物であつて社会を造らずには一日も満足に生存は出来ぬが、凡そ団体を造つて生活する動物では多くの団体が相対して生存し各団体が生存競争の単位と成る故、一団体内の各個体に利他の心がなかつたならば生存は全く覚束ない。斯くの如く利他心は社会的動物の生存に於ける必要条件である故、人間に限らず凡そ社会的の生活を営んで居る動物ならば必ず多少発達して居らぬことはない。蜂や蟻の社会的生活状態を観察すれば此事は極めて明である。されば利他心なるものは生存の必要上より社会的動物に生じた本能と見做すべきもので、人類に於ける利他心も素より此理に漏れる訳は無い。所が本能なるものは総べて多少盲目的で屡々誤まるものである事は、聊かでも動物の習性を調べた者の充分に知つて居る所である。例えば或る種類の蠅は卵を腐肉の上に生み附けるが、之は孵化した幼虫が直に充分の食物を得る為で、種属維持に取つては甚だ必要な本能である。然るに天南星科の植物には腐肉の如き臭気を発する花の咲くものがあるが、蠅が其所へ来て往々卵を産み附ける。また草の間を走り歩く蜘蛛の類は卵の塊を糸で包み恰も繭の如き形に造り、中から幼児が孵化して出る迄は常に之を携え保護して居るが、之は幼児の安全の為に頗る有益な本能である。然し若し人が試に其繭を奪い取り、其代りに紙片を丸めて投げ与えれば直に之を掴まえて繭であるかの如くに大切に保護し、甚しきに至つては鉛の玉を与えてもやはり之を掴まえ、保護する積りで一生懸命に引きずり

歩いて居る。斯くの如く本能なるものは屢々誤つた方向に向うても盲目的に働き、その為動物をして往々目的に適わぬ所業をなさしめるものであるが、人類の有する利他心もやはり其通りで生存競争の単位なる一団体の範囲内で働いて居る間は生存上甚だ有効なものであるが、宇宙万物を博く愛するまでに其範囲を拡げると、恰も蜘蛛が鉛の玉を大切に保護して居るのと同様な全く目的に適わぬ所業をする様に成つてしまう。強い光を放つ物体を視る時に、網膜上に其像の映じた所だけに光を感じるのみならず、之に接する周囲の部分も同じく幾分か光を感じるので光が実際より大きく見えることを生理学では Irradiation と名づけるが、我等から見ると自然物を愛すべく感ずるのは単に利他心の Irradiation に過ぎぬ。宇宙万物を愛することは今日人道の最高程度の如くに思われて居るが、以上の如き原因に基くもの故、實際はただ利他心と云う本能の一種の錯誤的作用に外ならぬのである。人類及び自然を虚心平氣に研究すれば従来神聖視し來つたものの実は余り神聖に非ざることを発見することが屢々あるが、我等は其度ごとに「認識に達する途中には多くの恥を堪え通さねばならぬ、此の事がなかつたならば認識の興味も極めて少ないであろう」と云うたニイチエの言葉を思い出すを禁じ得ない。

なお 詳つまびらかに考えて見るに自己を愛するばかりでは家は治まらず家を愛するばかりでは国が立たぬ故、家を愛し国を愛することは人間の生存上必要であるが、此の心は人間にては決して未だ発達し終つた訳ではなく僅に芽を出し掛けた程度に過ぎぬ。蟻や蜂の如き動物は力を協あわせて団体のために働くと云う本能が充分に発達して居る故、各個体の生れながらに為す所業は総べて団体の維持繁栄に適する様に成つて居るが、人間では此の本能が甚だ不充分であつて、ただ捨て置いては上下交々利を征こもめて国が危くなる故、人為的に之を補わねばならぬ。其ため昔から自己を愛する心を広げて自己を愛する如くに家を愛せよ、家を愛する如くに国

を愛せよと云う教が出来て、愛の範圍が広いほど尊いとの感じが生じたのであろうが、宇宙万物を愛する最高の徳の如くに思うのは、此の傾向が盲目的に正当の範圍を超えて、其外までも脱出した結果である。一方へ曲つた棒を真直に直すには反対の側へ曲げる積りで力を入れねばならぬ如く、極度の利己心に司配せられて居る人間等を教える為には其の反対の端まで引く位の積りでなければ丁度適當の所まで来ぬ故、子供や無智の輩に向うては極度の博愛を説くことが必要の場合もあるかも知れぬが、宇宙万物を愛するまで広げた博愛はそれ自身のみ就いて云えば全く以上述べた如き性質のもので少しも尊いことはない。

また仮に自然物を悉く愛することが善いとした所で、之が實際に行われ得ることであるか大に疑わしい。我々は衣食住ともに自然物を用いるの外に道はない故、生活して居る間は常に自然物に迫害を加えざるを得ぬ。家を建てるには樹木を切り倒さねばならず、餓を凌ぐには牛や鳥を打ち殺さねばならず、衣服を造るには蚕の蛹を何万億となく蒸し殺さねばならぬ、また米を得る為には無数の浮塵子を塵にせねばならず、単に薔薇の花を賞玩する為にも数万の昆虫を殺戮せねばならぬ。其他日々我々が自然物に加えて居る迫害を数え挙げたら実に際限はない。凡そ或る自然物が人間に利を与える場合は総べて其物に向うて迫害を加えて居るのである。また或る自然物が人間に害を与える場合には力を尽して其物を駆除せねばならぬ。利用厚生と云うのは取りも直さず自然物に迫害を加えることに当る。此等は如何に自然物を愛する人でも苟くも生活して居る以上は止めることは出来ぬ。鳥獸や魚肉を食わずに精進して居ることは出来るが、其代りとしてやはり他の自然物に迫害を加えざるを得ぬ故、実は五十歩百歩で著しい相違はない。されば自然を美なる如くに説き、自然物を愛する情を生徒に起させ得たればとて、其働き得る範圍は人間に直接の利害の關係のない区域だけに限られる故、頗る狭くて殆ど態々奨励する程の価もない。牛や豚を以て餓を凌ぐ以上は如何に之を愛

したとて、ただ従来五秒で殺した所を三秒で殺す様に改良し得るのみで、やはり殺してしまわねばならず、牛馬に荷車を挽かせる以上は、如何に之を愛したとて、ただ従来七度答つた所を五度に減じ得るのみでやはり答つことを止められぬ。人間は自己の利益を捨てて掛らねば此以上に自然物を優遇することは出来ぬ故、自然物を愛すると云うても、實際は単に感情だけに止まり、之を実行の上に現わすことは甚だ覚束ない。我国では牛馬が虐待せられて居るのを往々見受るが、之は最も拙な飼養法で人間に取つて甚だ不利益である故、成るべく速に改良する必要があるが、之は利害損得の上からの論であつて此所に述べる事とは全く問題が違ふ。我等は素より自然物を無益に虐待するを賛成する訳でもなく、また他人の自然物を愛するのを妨げる考えもない。人間に利害損益の關係のない範圍に於て自然物を優待するのは高尚な慰として甚だ結構であるが、ただ有りの儘を述べれば以上の通りである故、強いて之を以て博物学教授の一目的とするには足らぬと云うのみである。

以上述べた如く我等の考えでは、博物学を授けて、生徒をして自然の美を感服せしめ自然物を愛する情を起さしめると云うことは必要でもなければ、また出来ることでもない。博物学の倫理的価値は決して斯かることを人工的に生徒に説き込むのではなく、生徒をして虚心平氣に人類と自然とを觀察するの習慣を得しめて、人類と自然との有りの儘を知らしめる点にあるが、其の倫理的効力の大なることは僅に自然の美を感じ、一部の自然物を愛する如きと同日の論ではない。凡そ人間に關することを論ずるには先ず人間を知ることが必要である故、自然に於ける人類の位置を知るのには総べての倫理的思想の根本であるが之を知るには先ず自然の有りの儘と人間の有りの儘とを知らねばならぬ。而して之を教えるのが博物学である。されば博物学と倫理学との關係は甚だ親密であるべき筈で、決して従来如く殆ど知らずに離れて居るべきものではない。真

の倫理学は寧ろ博物学を基として其の上に建つべきものである。

眞善美は常に並べ称して人の理想とする所であるが、其の性質を比較すると眞と善美との間には著しい相違がある。前に述べた通り、自然は美でもなく醜でもなく、美も醜も共に其中に含まれてあるが善悪に關しても是と同様で、自然は善でもなく悪でもない。善悪に就いて詳しく述べることは略するが、善と悪との標準は常に我の方に有つて自然の方にはなく、我々は自己の有する標準に依つて他物を測り其の美醜善悪を評して居るのである。是に反して独り眞だけは標準が自然の方に有つて我の方にはない。自然自身の有りの儘が即ち眞の標準であつて我々は唯是を知ることに向つて徐々と進み居るのみである。而して眞に向つて進む方法はただ虚心平氣に自然を研究するより外にはない。我々の知識は何れの方面に向つても実に僅で、其の境を超えれば全く知らぬことのみ故、中々以て自然の眞、即ち有りの儘を知ることが出来ぬが、常に怠らず苦心研究すれば漸々一歩づつ眞を知る方面に進むことが出来る。地球の丸いことを知るに至つたのも、其の太陽の周囲を廻転するを知るに至つたのも、微細な黴菌が種々の病を起すことを知るに至つたのも、皆眞に向つて一歩づつ進んだ結果であるが、科学の求める所は即ち眞のみである。たとえ一歩づつなりとも眞を知る方面に進みさえすれば、それだけ我々の知識の範圍が広く成る故、直に之を利用して生存競争上他に優ることが出来る。博物学に於ても専心ただ眞を知ることが目的として研究さえすれば、実用上にも学理上にも莫大な利益を得られるのである。されば此学を授けるに當つてもただ今日我々の有する知識の程度に従つて自然の眞を紹介し、生徒をして自身に自然に接して其の有りの儘を知らしめることを目的とすれば宜しい。善と美との標準は時により国により異なることがあるが、眞の標準は永久不変であつて、之に近づくのが即ち人智の進歩である故、或る目的のために故意に事実を曲げて教えたればとて其の効能は僅に一時的に過ぎず、

一般の人智が進めば忽ち細工が現われてしまう。

以上はただ所謂自然いむゆるの美と、自然の愛とに就いて常に考えて居たことの概略を摘んで書いたのである。自然は美なりとか自然物を愛すべしとか云う考えは、教育学者や世間一般の人々のみならず、自然を研究することを専門とする博物学者の間にも甚だ広く行われて居る様であるが、我等は直接に自然を観察したる結果として、自然は美でも醜でもなく、また自然物を愛しても之を實行し得るのは無益無害の小区域内のみに限られると考えざるを得ぬ故、他と異なつた此の意見を發表するのも或は多少の参考の資とならうかと思つて此所こゝに掲げた次第である。

(明治三十八年三月)

- 『丘浅次郎集』（「近代日本思想大系」九、筑摩書房、一九七四年九月）所収。
- 読みやすさのために、旧かな遣いは新かな遣いに変更し、適宜振り仮名をつけた。
- 理解を助けるために適宜割注を附した。
- PDF化にはL^AT_EX 2_εでタイプセッティングを行い、dvipdfmxを使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。